

お葬儀はなんのため？ だれのため？

●目次●

1 お葬儀の由来と意義……………1

2 浄土宗のお葬儀……………9

3 よりよい旅立ちと、お見送りのために……………17

# 1 お葬儀の由来と意義

◎お葬儀に込められた、死者を悼む<sup>いた</sup>こころ

いつの時代でも誰にとっても、家族や愛する人の死ほど辛く悲しいことはないでしょう。その悲しみを乗り越えて、私たちは死者を悼む儀式を行ってきました。たとえば三万年ほど前まで地上を支配していたネアンデルタール人の場合、死者の周りに数種類もの花を供えた遺跡が見つかっています。およそ四、五千年前の縄文時代の青森県・三内丸山遺跡<sup>さんないまるやま</sup>からは、集落から海へ続く道の両側に、大人を二列に埋葬した墓地が見つかっています。おそらく、漁に出ていく人たちの安全と豊漁を死者たちが守ってくれることを願い、そのように埋葬したのでしょう。

古代から平安時代にかけては、政治的な権力者の巨大な古墳や墓が作られました。たとえば高松塚古墳<sup>たかまつづか</sup>の壁画には、死後の世界があたかも生前のこの世での生活が連続しているかのような絵が描かれています。死者は生前と連続した死後の世界へと生まれ変わり、残された人たちと繋が<sup>つな</sup>がっていると考えてきたのです。

しかし庶民はお葬儀を盛大に行うことはなく、市井<sup>しせい</sup>の念仏聖<sup>ひじり</sup>によって回向<sup>えこう</sup>して

もらうにとどまっていたのです。民衆がお葬儀を行うようになるのは江戸時代に入つてのことだと思われます。墓地を守る草庵ができ、やがて誰もが地域の寺の檀家になることが幕府によつて決められ、お葬儀の形も現在のような各宗派共通したものになってきたのです。

しかし、お葬儀に込められた、亡き人を悼み、感謝をし、来世での安穩と残された家族の新たな生活の幸福を願う、いわば「あの世とこの世とが結びついたところ」は、古代から現在まで生き続けているのです。

### ◎お葬儀は変化しているのでしょうか？

しかし現代では、私たちのほとんどが肉体的な死が人生の終末だと考えていて、生にのみ執着しています。なかには、死は人生の敗北と考える人さえいます。そうした人たちにとって、葬儀は死者と別れ、遺体を処理するための儀式でしかありません。もちろん、これまで家族と過ごした日々や友人との交流の終わりであることは避けようもない事実です。その意味では、この世での人生は儚く、あてないものであることは間違いありません。葬儀は「諸行無常」しよぎようむじようという仏教のひ

とつの真理を、残された人たちに感得させる「別離」の重要な場でもあります。

またこれまでは、近隣の多くの人々が葬儀の担い手となり、葬具を作ったり、もてなしの食事を作ったりして死者を送りました。これは農村ばかりではなく都市部においても同様で、地域全体の危機として、死を乗り越えるためでした。

ところが、現代社会は人の繋がりは縮小し、職業は多様化し、移動転居を生涯繰り返します。人はさまざまな地域の縁（地縁）や親族の縁（血縁）から切り離されて生きています。まして高齢者は故郷に残されたり、都市の孤独な住宅地に子どもと同居したり、施設で長期間暮らすことになります。近年の葬儀の縮小化が急激に進んでいる背景には、こうした社会状況がありそうです。

しかしお葬儀は、人が生きてきた証としても絶対に必要なものです。さまざまな困難や喜びを人々との出会いのなかで分かち合ってきた人の死は、決して家族や故人だけのものではありません。故人と関わってきた人たちにとっても人生の一部なのです。私たちは、亡き人と、生前ばかりかこれからも関わり合って生きていくことを確信するために、葬儀に参加することが必要なのです。

## ◎浄土宗のお葬儀の意味——極樂往生の二つの目的

私たち浄土宗のお葬儀、それは、臨終が迫った際、阿弥陀さまに極樂へのお迎えに来ていただき（来迎引接、らいこういんじよう）、亡くなった人を仏さまのお弟子にして極樂往生を願う儀式です。では、何のために極樂往生を期するのでしょうか。

### 〔俱会二処の教え〕

一つは、先立った方々との再会を果たすためです。お念仏をとなえ、極樂に往生したなら、先に往生した方々と再び会うことができますと、浄土宗が抛りどころとしている經典『阿弥陀經』あみだきように説かれています。「俱会二処」という教えです。

浄土宗を開いた法然上人（一一三三・一二二二）の詠まれたお歌、

つゆの身は　ここかしこにてきえぬとも　こころはおなじはなのうてなぞ  
には、「朝露のように儚く、はかないところで消えるかもしれない私たちのいのちですが、共に往生し極樂の蓮の台で再びお会いしましょう」との思いが込められています。  
お釈迦さまは、人生には愛する人と必ずいつか別れなければならない苦しみ（愛別離苦）あいべつりくがあると説かれました。この世に永遠のものは何一つないというお